

も く じ

原著者の序

第1部 知覚的な照合枠

第1章 心理学への挑戦 3

心理学——行動の科学 7

心理学のいろいろの照合枠 14

理論のレベルと適用 17

第2章 行動の知覚的な見方 23

行動の知覚的な見方 23

あらゆる行動には法則がある 26

知覚の場が行動を決定する 27

“現実”としての知覚の場 31

現象の場の諸特徴 34

共通の知覚がコミュニケーションを可能にする 47

行動の理解と予測 53

知覚の諸変数 55

第3章 人びとは何を要求するか 57

人間の本性と宇宙とにおける要求の起源 58

基本的な人間の要求 67

要求が知覚に及ぼす諸影響 86

要求および動機づけの問題 89

第4章 知覚の媒介物：身体的な有機体 93

知覚することに与える身体的な諸制限 94

覚知の生物学的な諸起源 96

空間的な覚知の発展 97

時間についての覚知	99
覚知の成長	101
身体的な有機体が知覚の場に及ぼすいくつかの影響	107

第5章 時間と機会は知覚に影響する 126

知覚することは時間を要する	126
機会は知覚に影響する	130
不変性という概念	140
個人の文化と知覚するための諸機会	144
知覚の永続性	155
過去の諸機会が未来の諸知覚に与える影響	157

第6章 目標、価値、およびテクニック 162

目標と価値が知覚に及ぼす諸影響	171
テクニックが行動に及ぼす諸影響	180
人びとに対する支配による要求の満足	183
事物の支配をとおしての要求の満足	188
他人との同一視による要求の満足	189
身体の変化をとおしての要求の満足	191

第7章 現象の自己の発展 196

自己とは何か?	197
自己概念	198
現象の自己と自己概念	203
現象の自己の諸特徴	208
現象の自己の諸起源	213
現象の自己の発展	216

第8章 知覚におよぼす自己の影響 234

個人の照合枠	234
知覚の選択	242

自己概念はどのように変化するか	254
第9章 場における諸知覚の利用可能性	267
分化および要求の満足	267
トンネル視	271
知覚の限定と脅威の経験	275
自己防衛が知覚に与えるさらに進んだ諸限定	278
脅威の経験の強さ	284
脅威の諸原因	292
脅威のもとにおける行動の変化	305
第10章 学習, 忘却, および問題解決	309
分化としての学習	309
要求のひとつの機能としての学習	314
学習の理法	320
記憶と忘却	325
推論と問題解決	336
第11章 諸能力, 情動, および感情の性質	340
知覚の問題としての知能	345
行動の最大限の諸限界	348
知能検査は何を測定するのか?	352
現象の自己と情動	364
現象の自己と感情	374
参 考 文 献	382
文 献 一 覧 表	392
訳 者 あ と が き	421
索 引	425